
独奏のクラヴィーア

木村 優希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独奏のクラヴィーア

【Zコード】

N1605F

【作者名】

木村 優希

【あらすじ】

過去を置き去りにした世界で、歌う侵略者と奏でる抵抗者、両者の音は交わらずに激しくぶつかり合つ。その中で少年は自由を貫き通す事ができるのか・・・。音楽が適当に入ったライトロボットSF。空想科学祭に細々と参加しています。

第一樂章 テレーゼ

音楽にジャンルはない。あるいは良い音楽と悪い音楽だけだ

オレは自由でありたい。どんな時も。そして自由を侵されたくない。誰に対しても。

この世界には本当の自由など存在しないかも知れない。
だからこそオレは自由を持ち続けていたい。どう思われようと構わない。

この摩天楼の下に今、田の前にいる女はオレの自由を必ず侵す、自由の権利を剥奪する・・・そんな気がした。だからこそ自由を剥奪される前に、オレは田の前の女に言い放った。

「髪の毛、切りに行つてきます」

「ちよつと待つて、ヨハン・ティアギレフ君」

なぜか怒っている金髪ショートヘアの女教師、テレーゼ・キャロラインとか言つたか。

それよりもなぜオレはあんな事を考へていたのか全く覚えてない。よくよく考えてみれば、権利とか、剥奪とかつてオレはあまり使わないよな・・・。

「ヨハン君、聞いてる?」

「いや、聞いてないです」

「だから、なぜジャージに着替えてないの?」

やはり怒っているあの女教師。まあそれは別にいい。

午前の体育の授業。校庭に学校指定のジャージを着ていない、オレを含めた三人の人間がいた。

ジャージを忘れた柔らかな芥子色の髪でメガネのたぶん美少年、アーサー・ネヴィソン。

体育見学常習者で体の弱い亞麻色ロングヘアのたぶん美少女、リュリ・メシアン。

男にしては長い髪で自称自由人のオレ、ヨハン・ディアギレフの三名だ。

たぶん、というのは周囲がそう言つてなんとなくなづけた。

「ヨハン君、聞いてるの？」

「聞いてないです、テレーゼ先生」

「どうして聞いてないの？」

「走つたら髪の毛が目に入るじゃないですか？」

敢えて話を噛み合わせない、噛み合わせてやる必要なら全くない。少しだけ余所見をして見ると、アーサーが、それはヤバい！みたいな感じのジェスチャーをしていて、たぶん外からしてみれば挑発してるように見えるだろうな。

先生の方に顔を向けて見る。顔がかなり恐い、絶対にキレている。

「髪の毛なんか結べば良いじゃない！ねえ、監もやつ思つでしょ

！」

そう言い、先生が皆の方を向いた瞬間に、オレは校庭にある正門

に、全速力で走った。

「先生！いません！」

「えつ！？ホント？」

別に消えた訳じゃないだろ、と心の中でシッコリをしつつ、オレは校門を開けて、二十階を優に越えるビルの玄闇を走りさつた。

そろそろ歩いても良いかと思えたのは磁力信号を渡り終えた後だつた。

磁力信号とは一方から出でてくる橋のような道（歩道のほうが車道より高い）は信号が青から赤へ変わるときだけ磁石の性質を持ち、全ての靴屋で売られている靴の裏にも磁石が付いており信号の変わり際に磁石がくつつき合つて動けなくなり、橋と共に戻されるという信号だ。

その前になんでこんな熱心に説明しなければならないのか？

顔を上げるとショーウィンドウがあり、自分の顔がガラスに移つていた。

結構目付きが悪いがコレくらいがちょうどいいだろ。

髪の毛は確かに長かつたが別にどうでも良かつた。

顔を上げると空ではなくディエーチが見えた。

ディエーチというのは十階に作られた第一の道路の事で、車道と歩道の両方がオレの頭上にある。なので地面であるここは朝なのにも関わらず街灯が灯つている。

ここは太陽の光が届かないという事もあり、歩いている人が少ない。不気味という意見も聞いたことがある。

まあこんな所に青ジーンズとよく解らない模様の書いたラ・マリエッタ（Tシャツ）を着たヤツが居たら不良にしか見えないだろう。実際そうだが。

走るか・・・目的地は「」じゃない。オレは静けさの中走り始めた。

車が浮いている浮いていないに関わらず渋滞していた。ほとんどの車が声しか聞こえないラジオを聞いている。誰かが携帯でニュース番組を見ていた。

アナウンサーの声しか聞こえない。

一台の車が映画を見ていた。

俳優の声しか聞こえない。

この世界に音楽は存在しない。

走りに走つてオレが到着したのは、ほぼ毎日来ている「」の山だ。

この場所は人工の島の焼却場で、陸から鉄橋で渡る事が出来る。

そしてここに「」の山とは、今では取り扱っている店が減った自動車シッキというモノについていた足、つまりタイヤの山なのだ。

だからといってタイヤで無邪気に遊ぶ訳じゃない。

数あるタイヤの中から、いつものタイヤの所に行き、そのタイヤを退かす。

そうするとタイヤの下から黒塗りでツヤのある物体が現れた。イヤではない。

角張っているが、四角くない。滑らかな曲線があるが、丸くない。

オレもそれの名前は知らない。ただ、手前にある黒塗りの蓋を開けた。開けると白と黒の鍵盤が現れた。いつもなら目の前にある場所に紙を置くのだが、鞄は学校に置いて来てしまった。仕方ない、覚えている曲を弾くか。

白と黒の鍵盤に手を置く。白の鍵盤を指で押さえると、透き通る

ような綺麗な音が響いた。すぐに続けて他の鍵盤を押さえる。

指の速度が踊る様に速くなると同時に音も速くなった。

それはもう既に音では無く、曲となっていた。

透き通るような音色が沈黙を支配して行く。

曲が次第に遅くなり、音が消えて行き、勝手に動いていた指も既に止まっていた。

これを弾いていると不思議と氣分が良くなる気がする。

もう一度弾こうかと思ったその時、ソイツが空から降りて來た。人型。最初はそれしか確認出来なかつた。何故なら、タイヤの山が崩れたからだ。

タイヤが落ちてくる。鍵盤に足を掛け、オレは黒い物体を庇う。タイヤがオレの背中に落ちた。かなり痛い。黒い物体に当たつていたら絶対に壊れてしまつただろう。それだけ大事なモノだ、コレは。

目の中にあつたタイヤの山が無くなり、人型のモノがこちらを見ていた。

体が赤と黒が変に混ざつたような色をしている。今頃気が付いたがソイツは目が無いにもかかわらず、オレの方を顔が向いている。

今になつて、逃げなければ、と思い出した瞬間、空から二体目の黒塗りの物体が現れた。

一体目は急降下しながら、右腕を突き出したその鋭く、長い指で一体目を突き刺そうとした。一体目はオレの方を向いたまま動かない。やつぱり見えてない。そう思った瞬間、二体目の五本の指が一体目の左肩に突き刺さり、一体目は一体目を海に落とした。

一体目は一体目と同じ人型で、目測で二十メートルはありそうだ。外見は何だか角張つていて重そうな雰囲気だ。全体的に黒く、少しだけ銀色の装飾がされており、背中には翼竜の翼の骨格のようなモノが一本付き、それぞれ六本に枝分かれしている。

すると突然ソレの頭が開いて人が一人出て来る。

「テレーゼ先生・・・」

「あひ、ヨハン君髪の毛切つてないんだ・・・」

「先生、今髪の毛関係無いですよね?」

「そつか、やつぱりヨハン君は・・・」

「聞いてますか?」

「ヨハン君ー・やつぱり君はこの、シンフォニアに乗る運転なんだよー。」

清々しい笑顔で先生そう言つたが、妙な沈黙が訪れた。

シンフォニア、とかいう聞いた事がない単語のせいだと思つが、原因は他にある気がする。テレーゼ先生は、シンフォニアと呼ばれたモノの頭から身を乗り出しながら、軽く咳払いした後、こう言った。

「えつと、君はコレに乗る運動なんだよ?」

「運命、ですか?」

「そうよー・それ、それ、それよー!」

そんなんでこの人、よく教師に成れたな・・・。

そう思つた瞬間、海に沈んだはずの一休目がシンフォニアの後ろに現れた。

「やつぱ、あんなんじや死なないわね・・・ヨハン君、手荒くするから！」

オレが何か言つ前に、シンフォニアの黒い手に捕まえられ、そのままシンフォニアの開いている頭に放り込まれた。

「ヨハン君大丈夫？」

「頭打つて大丈夫なわけ無いだろ！」

テレーゼ先生は適当に笑つてごまかしている様だ。

少し周りを見渡すとシンフォニアの頭の中は一人であれば結構広く、先生は真ん中より少し前にパイプ椅子に座つて前を向いている。その視線の先のモニターに、一体目の姿が写しだされていた。

「行くよーー！」

先生が叫ぶと同時にシンフォニアが一体目に向かつて走りだした。走り出しシンフォニアが揺れると先生に繋がつていてるケーブルも揺れている。だいたい何のためのケーブルなのか。

モニターを見るとシンフォニアの右拳が一体目に向かつている。一体目はそれを左に避けた。

続いて勢いよく左拳を突き出しだが、右に避けられてしまう。間もなく右拳を繰り出すも、そのままの体勢で右に避けられた。なぜ目が見えないのに攻撃を避けられるのか。

こうした攻撃が続く中、オレは何故かイライラして来た。どちらの攻撃も全く当たらず決着が付かない。一体目はシンフォニアに一切攻撃して来ないし、シンフォニアの攻撃は全く当たらないからだ。

「なんか武器とか必殺技みたいなのねえのかよ！」

「あつ、忘れてた！」

おい、なんだソレは。武器とかあつたらあんなシャドーボクシングなんかしなくてもよかつただろう。

今の隙に一休目は後ろに下がり距離を置き始め、そして顔の下が割れた。あれは・・・口か?

物凄い声にすぐに耳を塞いだ。あの声は・・・・・男?滑らか

ていた。そう、たとえるなら・・・精神・・・?

「ヨハン君耳塞いで！」

一
遅
い
わ
！
注
意
遅
い
！
」

……まだ耳が立たないする……

いきなり衝撃が起き、床に叩きつけられた。先生は椅子ごと前に倒れ、モニターに顔をぶつけていた。そりやあパイプ椅子だし仕方ないだろうな。モニターを見ると隙だらけのシンフォニアに一体目の蹴りが直撃し元焼却工場にめり込んだ様だ。

もう一体目は声を出していない。

「ヨハン君、大丈夫？」

「アンタが大丈夫か! というか、セツセツ武器使ってくれ!」

「その為に君を呼ぼうと思つたんだよ!」

一瞬意味が分からなくなつた。いや、今のは質問に答えて無い気がする。

オレが今の言葉の意味を考えている間に先生は何か操作をしており、し終わると田の前のモノを見た。それは見慣れた白と黒の鍵盤だった。なんあの鍵盤がここに・・・? この鍵盤を知つていてああ言つたのだから先生はオレがアレを弾ける事を知つているのかもしれない。

「コハン君は指が器用だつたよね!」

そんな事か・・・。せりやアレを七年近くも弾いているのだから、指も器用になるだろ? アレがバレンくて少しほつとした。しかし、モニターを見ると一体田がこちらに走つて来てくる。蹴られたせいで結構飛ばされたらしく、まだ距離はあるようだが安心は出来なかつた。

話が反れた気がする。大体鍵盤は武器じゃない。

「誰がそんなモン出せつて言つた! 武器出せよ武器を!」

「だから器楽武装なんだつて! コハン君がコレをやるんだよ!」

アンヌ先生の口から、また変な単語が出て来た・・・だが話を逸らすワケにはいかない。

「それだつたらアンタがやればいいだり」

「だつて私、コレに乗るの初めてだし・・・」

初めてって言つたか、今。だから弾けないってか、このヤロウ。と
りあえず聞かなかつた事にしよう。足音が近くなつてきた。一
体目がもうすぐ側まで来ている危険な状況らしい。

「弾けば良いんだろ、弾けば！」

ここで死んだら自由もクソも無い！半ばヤケクソで言つてしまつ
たかもしけない。

オレは鍵盤の上に手を置いた。しかし先生が鍵盤の前に立つてい
たので先生の肩越しに鍵盤を見ていたので、何か先生を包み込むよ
うな体勢だつたが今は関係ない。

そしてオレは弾く。自由のために。

鍵盤の上を指が踊つている。

透き通るような音が辺りを包む。

一体目がよろめく。音に弱いのか？

それを知つたからといって無茶苦茶に弾いたりしない。

鍵盤を見なくてもこの曲は何度も弾いた。記憶している。
また一体目がよろめいた。やはり音に弱いようだ。

音の旋律が青い空に響く。

旋律と同時に黒い棒が後ろから現れた。

形からして背中の六つに枝分かれした骨のような翼の先端。

その黒い棒は白い音の刃を鍵盤の様に出していた。

十一の黒い棒は一体目^{ドーティチ}の周囲を回りながら浮遊していた。

曲のテンポの様に。穩やかに。

旋律の最中に一体目の右腕が突然、音の刃を帯びた黒い棒に斬り
捨てられた。

続いて左腕が背後の音の刃に切断された。

黒い棒が一体目順番に三本刺さり、一体目は焼却工場の前で倒れた。

何も無い広い場所で倒れたので、なにかが下敷きになつている事は無いだろう。

しばらく曲を弾き続けていたが、黒い棒がシンフォニアの周囲を回つていて物騒だつたので曲を止めた。

「これで良いのか？」

自分としてはもつと弾きたかったが弾く目的は一体目を倒すことだったのでオレは一応先生に聞いた。黒い棒は視界から消えているので、元の場所に戻つたのだろう。

「やつぱりセ・・・運命だよね？」

先生はオレを見ず呟く様に言った。

運命という言葉は嫌いだ。この世で一番嫌いな言葉だ。

オレは運命から逃れるために自由に生きていく事を決めたのだから。

「運命なんてそんなモノ無いだろ」

先生は突然振り向きシアンブルーの目でオレを見つめて来た。かと思つと突然、笑顔になつた。

「そうなのかな？」

笑顔で問い合わせてきた先生を見て一つ思う事があつた。よくわからないな、この人は。

シンフォニア
交響曲は始まつたばかりだ。

第一樂章 テレーゼ(後書き)

どうも作者の木村です。

この作品は音楽とロボットを合わせた設定でやつていきますが一步間違えるとアレになるな・・・ていう気がしてなりませんよ。アレが何かは想像におまかせします。

とりあえず時間だけがないので更新は速くしたいと思つています。

(今回の音楽)

ベートーヴェン・ピアノソナタ第24番「テレーゼ」

23番から4年のブランクが空いた後の一曲。

テレーゼ・フォン・ブルンスヴィックという伯爵令嬢に捧げられた。

第1樂章 Adagio cantabile - Allegro -

manon troppo

第2樂章 Allegro vivace

の二つの樂章から成る。ちなみに一体田は第1樂章の途中で撃破された。

ついでに書つとヨハン君は題名を知りません。

レオニヌス：「地上のすべての国々はみた」から
ヴィイイイイといつのは口から抜糸。

多聲音楽など木村にはよく解らなことこの。

ただしオニヌスは1150年から1201年くらいまで活躍したようなので結構古い音楽らしい。

とつあえず書くこと書いたので長くなる前に終わらせますよ、はい。

後書きつぱいのまま時間がある時にしたいと思います。

あ、苦情やお願ひ、クレームや感想などありましたら送つつけやつしてくださいね。

それではまた。

第一樂章 クライス レリアーナ（上）

その才能に驚く他ないが、残念な事に彼は傍若無人な人間だ。

「シンフォニアって何ですか？」

「シンフォニアっていうのは、対オルガヌム戦闘用の機械の事ね。あとネーミングは適当だから、そここの所は何も聞かないでよ？」

「オルガヌムって……？」

「オルガヌムっていうのは、さつき戦つたヤツの事で三つ位種類があるわ。さつきクラヴァサンが倒したのはアルフレッド型みたいね」

「クラヴァサン……？」

「クラヴァサンはヨハン君が乗る事になった、あの黒色のヤツの名前だよ。他に質問とかある？」

「先生、近いです……」

今、目の前に、いや鼻のすぐ前に先生がいる。

このままの体制だとなんかアブナイ気がする……。

先生は渋々離れていき、元々座つていたソファに腰掛けた。ついで渋々って……？

ここは六番倉庫の中でシンフォニア三機が待機している。見た感じでは、黒・銀・茶色と金色のシンフォニアの三機。その為スペー

スがあまり無く、隅の方にあるソファに向かい合つて座つていた。

「そのオルガヌムつてヤツはどうから沸いて来たんですか」

「なんか、月から沸いて来たみたい。でも数は一定量なんだつて。ヨハン君が来てくれたからきっとすぐ終わっちゃうよー」

妙にテンションの高い先生。無理矢理連れて来られてテンションの低いオレ。

真つ昼間だけ今なら十秒で寝れる・・・大事な事を言つ忘れていた。

「その前にオレはまだ、乗るとは言つてませんよ?」

「何言つてんだ、上手く弾けてたじやねえか」

話に割り込んできたその男を睨みつける先生のシャンブルーの目が恐ろしい。

その眼力を教師の威厳として使えばいいものを。

先生が睨みつける先には、煙草を吸う小汚い茶色のジャケットに擦り切れた蒼いジーンズを穿いた茜色の髪の男、フイリップ・アダムスが壁に寄りかかって立つていた。一通り自己紹介はして貰つた。鍵盤を弾くと言つたこの人はタダモノでは無いだろう。

この時代に一種の麻薬とされ、売買および服用を禁じられている煙草を持ち、吸つているこの男はやはりタダモノでは無いだろう。

「オッチャン、乗るも乗らないもーイチャンの自由だろ?」

窓際のパイプ椅子に座つているダボダボのコート・・・いや、汚れすぎて白に見えない白衣を着たほつれ氣味の栗毛の女、マリア・

プラネスが飽きれながら言った。

今名前を出した二人しか自己紹介されていない。そして今、この倉庫の中にはオレを含め四人しかいない。

つまりこのクラヴァサンを所持している組織……いや、グループにはフイリップとマリア、そしてテレーゼ先生の三名しかない、と言つ事になる。

「オッチャン言つたな！まだ28だ！毎回言つてるだろ！」

別に良いじゃない、と流したマリア。

年齢の違ひって結構大事な話だと思つぞ？まあ、その鬚面だつたらオッチャンと呼ばれても不思議ではないな。

「で、乗らないんだろ？」「イチヤン」

いきなり話しかけられて反応が遅くなつたが、質問を頭の中で確認し軽く頷いた。アレが弾けるからつてクラヴァサンには乗りたく無かつた。

エッ、嘘！と声も先生から聞こえるが、色々言われそうなので無視した。フイリップがオレに、冷たい視線を突き刺している。すると彼の口が開いた。

「坊主、何故乗らない？オマエには戦えるだけの力が備わつている。ソレこそ運命、つてヤツだろ？」

煙草の煙と共に出てきた運命という単語に反応してしまつ。この男はオレがクラヴァサンに乗らない事に疑問を抱いて居るらしい。

「マリアさんも言いましたけど、乗る事も乗らない事もオレの自由なんですね？ フィリップさん」

嫌味っぽく言つてやつた。ホントは運命なんて知るか！とキレてやううと思ったが、どうにもガキっぽいので心の中に留めておいた。フィリップは溜め息をつきながら鎧付いたホワイトボードに歩み寄り、その下にあつた水の入つたバケツに短くなつた煙草を投げ入れた。ホワイトボードにはブーツの様な形の陸の地図が貼つてあつた。

所々バツマークが付いている。

「イタリア領土の中に、機能している都市はもうこの場所、旧ローマと旧ミラノしかねえんだよ、坊主」

多分この時代にその地名を知つている人は少ないだろ。過去を捨て、自分達の手で未来を作つて行くと言つ人間達の技術革命が起きた事により、ローマやミラノといった地名は無くなり、番号で呼ばれている。

さらに数学、幾何学、理科、技術が特化され、宗教、音楽、美術、古典、歴史といった科目がすべて排除された為に過去の単語を知る人は少ないので、と言う事をあの糞親父に叩き込まれたワケだが。滅びているかもしねない」

「そしてヨーロッパの中では、旧マドリード、旧ベルリン、旧ロンドンが今のところ機能している事が確認できた。その他は死に掛け、死んでいる都市だ。だがそれはヨーロッパだけの話で他の大陸がどうなつているのかは全く解らん。もう既にヨーロッパ以外は

フィリップが説明し終わると、マリアは少し険しい表情になり、先生は顔が俯いた。

オレはソファから立ち上がりながら叫んだ。

「だからってオレがアレに乗る理由にはならないだろ！」

「シンフォニアに乗れて尚且つ器楽武装が使えるオマエを見す見す野放しにしろって言うのか！？今は一人でも戦力が要る状況だ、分かれ！」

これだから大人は嫌いだ。使えるヤツは運命やら天才などと書いて囃し立て、使えないヤツは捨てる。

その昔、人は平等とか言ったオヤジ共が居たらしいが、才能という言葉が生まれた時点で平等じゃないだろう。

今、オレは使えると言われた事に腹が立つて、とても。誰かにとつて使える、都合の良いヤツにはなりたくない。オレは使えないでもいい、自由であれば。それだけで。

「分かんねえよーそんな下らねえ事！誰が乗つてやるか、そんなモンに！」

「！」の生意氣な糞餓鬼が！

右拳で殴り掛かつて来るフィリップ。暴力で解決すると思つているのか。

とりあえず軽く避けて裏拳でも当てるやるか。

「ケンカはダメだつて！」

いきなりオレとフィリップの間に割つて入ってきた先生。それに気づいて拳を下ろしたフィリップ。

「二人ともケンカするために会つたワケじゃないでしょー。」

涙目で訴えるように言つた先生。

まあな、と先程とは全く態度の違うフイリップ。少し困つたような表情をしている様に見える・・・気がする。

「フイリップ、叩くのはダメ・・・痛いよ、大きな声で怒鳴るのもダメ・・・怖いよ、そんなことしても変わらないよ・・・」

俯いて細々と囁いた先生。声が小さかつたが十分に聞こえる距離だった。

フイリップは明後日の方を向いている。叱られたから、というより顔がまともに見れないと言う方が正しいように見える。

「ヨハン君も、そんな才能があるんだから、人助けだと思つて・・・」

「オレは人助けするつもりはさらさらありません。ただ自由で居たい、それだけです」

先生がハッと顔を上げる。少し涙目だ。人助けをしないという事に異議を唱えているのかもしれない。

オレには人を助ける意味が解らない、所詮自業自得ではないのだろうか？自分の事なのだから自分で解決して欲しい。それこそ迷惑ではないだろうか？

死にたきや勝手に死ね。迷惑かけずにな。

先生が今にも泣き崩れてしまいそうに見えるが、生徒の前なので泣けないのだろう。

「その自由つてのはわかつた。だがなオルガヌムは世界を滅ぼし

掛けている。世界がぶつ壊れたらオマエもタダじゃ済まねえだろ？

「だから何ですか」

はつきり言って世界がどうなるかなんて興味ない。世界が水に覆われようが、砂漠になろうが、月が墮ちて来ようが関係ない。独りで生きていく自信がある。

地球が真つ二つになつたら・・・その時はその時だ。フイリップが呆気にとられたような驚いた顔をしている。しばしの沈黙。誰も言葉が出ないらしい。

「ニイイチャン、一田考えてみたうぢつよ？」

振り向くとマリアがパイプ椅子に座りながらこちらを見ている、オレに話しかけたらしい。

「考え直すとでも思つてるんですか？」

「話の流れでそう言つたほうがいいと思つた」

流れつて・・・まあ別にいいけど。

そう言つとマリアはポケットから煙草を取り出し、マッチに火をつけ煙草に火を移した。

この町でマッチ、ライターなどの小型火器を所持していると人為火災未遂の容疑で逮捕される。マリアはマッチを振つて火を消すと、ホワイトボード下の水入りバケツに投げた。

奇麗な放物線を描いてマッチはバケツではなく床に落ちた。マリアが口に含んだ煙を吹き出すと不意にボソッと呟いた。

「アンタから学校は？」

あ、と言い残し開いた口がしばらく閉まらなかつた先生だつた。

残り数分で授業が終わるのにもかかわらず、オレは屋上で掌を枕にして寝そべつていだ。正直言つてあの密室空間に何分もいることが耐えられない。窓はあるから密室ではないな。

あの後、先生に本田一慶田の連行をされたオレは、校長の次に偉そうな人に先生と共に謝る破目になつた。先生も無断外出だつたらしい。

ほんと空返事で通し、話を聞いていなかつた。

偉そうなヤツが紙を何枚か押し付けて反省しろと言つていた・・・かもしれない。

先生が何やら弁解していた・・・気がする。

偉そうなヤツが時計をちらちら見て、さつさと教室に戻れと怒つて職員室に戻つてしまつたと思つ・・・数枚の紙を残して。そしてオレは記憶が不確かであるような気がして、いつも屋上に戻つてきたのだった。

側にはクシャクシャに丸まつた紙が四つ、誰に作り方を教えてもらつたのか分からぬ紙ヒコーキが一つある。飛ばしてみたら面白いかも、と思つたが気分が乗らないのでそのまま側に置いてある。空にはドームに穴が開いたかのように、数々の摩天楼の間から蒼い空が見えていた。

商業地区ではないのでティエーチは存在していないが、今の人とはこの摩天楼に住んでいる。

青は赤に変わりつつある空。同じ形の無い空は見ていて飽きない。空に手を伸ばす。

そこまで飛んで行きたい。自由に遠く高く飛んでみたい。何度ここでそう思ったことか。

だけど人は自由にはなれない。必ず不自由が付いて回る。

ビル風が吹き、頬を伝つてていく。丸めた紙がカサカサと音を立てていく。

オレはすぐさま起き上がり、紙ヒローを手にすると風の向かう方へ飛ばした。

風に乗りビルの谷間を悠悠と飛んでいく紙ヒロー。

しかしこの自由の翼は落ちてしまうだらう。

この世に永遠など存在しない。きっと当たり前の事なのだらう。それでも人は永遠を求め続ける。それこそ永遠に。

希望だけが永遠かもしだれない。

しばらくその紙ヒローを眺めてそんな事を考えていた。見失つてしまつた。

「戻つていたんだな？」

後ろから声が聞こえた。

振り向くと芥子色の髪の毛で伊達メガネを掛けた少年、アーサーが軽く片手を挙げていた。隣に亞麻色のロングヘアの少女、リュリが微笑していた。

アーサーは軽そうなオレのカバンを投げて渡してきたので、オレはカバンをうまく受け止めながら返事をした。

「一応な」

空返事だつたかもしだれない。

「フツと消えてフラツと現れるのがヨハンだからな、いつもの場所に戻つていると思つたよ」

ソレは影が薄いって事を遠回しに言つてゐるだけなのか？

反射的に目を逸らし舌打ちした。

グシャツという音に続き、痛え！とアーサーの叫びが聞こえた。二人を見ると、アーサーが頭を抱えて蹲っている隣でリュリが彼に先程の微笑を向けていた。

凶器・・・推測によるとカバンだと思われる。

備考・・・病弱な少女による犯行。

動機・・・彼の迂闊な発言による衝動的犯行。

頭の中に今の状況が簡潔に現れた。オレなんかスゲエ。

「帰るか！」

無理矢理に笑顔を作つて問いかけた。一番妥当な判断かもしれない。

「うん！」

他の男子であれば見とれてしまつ程の笑顔で返事をしたリュリ。

「そうだな！」

片手で後頭部を押さえながら立ち上がって返事したアーサー。屋上から出る直前、振り返り空を見上げる。

二人とは近くも遠くも無い距離で付き合つてゐると思つてゐる。

一人がどう思つてゐるかは分からぬ。

一人を守るためにシンフォニアに乗れと言われたとしてもオレは乗らない。

親友でもなく疎遠でもない、空模様のよつとよくわからない関係だから。

「理由になつて無いな・・・」

独り言を空に向かって呟くとオレは独り言を言つてしまつ自分の頭の心配をしつつ屋上から出た。

エレベーターを降りると十八階だった。

居住地区と工業地区のビルは平均十五階、商業地区のビルは平均二十階建てのモノが多いため、オレの住むビルは平均より高く作られている。

エレベーターから降りたのはオレだけだった。

ビルの中心にエレベーターが四機稼働しておりちょっとした広間のような場所に出る。

エレベーターの前には廊下があり、突き当たると人が住む部屋のドアが並ぶ廊下に出る。

また熱心に説明している自分がいる。誰に説明してんだ？

オルガヌムとかシンフォニアとか意味分からん言葉のせいで頭がおかしくなったのかもしれない・・・。

一つの黒いドアの前で止まり、ポケットから鍵を取り出して上の鍵を開ける。

そういうえば指紋認証型や網膜認証型の鍵はウイルスやらハッキングやらいで簡単に初期設定をし直す事ができ、普通に入ることができるとニュースで言つてたな・・・犯人は部屋に居座り続けたらしく、元の住人がビルの管理人にリセットを要求するも効果が無く、警察は窓からの強行突破で犯人を逮捕したらしい。

要はどんなモノを作つてもソレを超えるモノが作られるのだ。いい意味でも、悪い意味でも。

思い出している間に下の鍵も開け、ドアを半開きにしていた。誰かいる・・・？中が少し明るかつたため直感した。

中の構造は玄関とキッチンもあるリビングの間に廊下があり、個室が一部屋とトイレ兼シャワールームが廊下を挟んで存在している。今はリビングから光が漏れているらしい。

誰がいるかは分かつていて。ただ顔を合わせたくない・・・。中に入り玄関のドアを閉め、鍵も一つ閉めた。

廊下を忍び足で歩いている。もう少しでオレの部屋に着く。ドアノブに手を掛けた。

「帰っていたのか、ヨハン」

ばれたか・・・軽く舌打ちした。振り向かず返事をする。

「ああ、親父」

身体を動かさず後ろを見た。短く切った黒髪に挑発的な目つきのその上にメガネ・・・多分伊達ではないを掛けた親父が、いつもの誰も信用しないような目つきでこちらを見ていた。

胃がキリキリと音を立てている、それほどの嫌悪感。敵対心。

「勉強はしているのか?」

「当たり前だろ?」

外から見れば普通の会話だが、二人の間には重すぎる空気が流れ、オレは親父にありつけの嫌悪感を剥き出しにし睨み付けている。さらに親父の挑発的な目つきがオレの敵対心を駆り立てる。時間が過ぎるのが遅い・・・胃がかなり痛く、その痛みも嫌悪感に混ぜて親父に送りつけている。

「・・・・・・・・・・そつか

戦闘終了。

親父は自分の個室へ入つていった。嵐は過ぎ去った。

胃の痛みから解放され、冷や汗が吹き出し疲労を身体に感じた。自分の部屋へ入るとすぐにベッドに倒れこんだ。今日一日の疲労はココから来たんじゃないだろうか？

ていうかもう何も考えたくねえ。

一瞬シンフォニアが頭を掠めたが、ソレの答えは出ていたので気にも留めず深い眠りに落ちていった。

第一樂章 クライス レリアーナ（上）（後書き）

どうもまた木村です。

どうやら言わなきゃならない事が沢山あるようです。
まず、タイトルは曲の名前なので本編には80パーセント関係ありません！

クライス・レリアーナなんてキャラはできませんよ！

とりあえず（上）なので曲の紹介はありません。

なるべく話の内容とタイトルが合つように選んでみますが今回だけは許してください・・・お願いします。

あと、ネーロとか変なフリガナが振つてあったと思いますが、舞台が旧ローマということもあり、50パーセントくらい信じていイタリア語です。

なぜ50パーセントなのかといつと、「六ヶ国語会話1」なる本を持つておりそこに書いてあつたモノを引用したのですが、コレの初版が昭和35年ということもあり半分信用している次第であります。さて、結構長くなつてきたのでこれで終わりにしたいと思います。では、また。

第一樂章 クライス レコアーナ(下) (前書き)

今日は無駄に長い氣がします・・・・

第一樂章 クライス レリアーナ（下）

太陽が真上にあるこの時間、屋外にいるのはこの三人だけだろう。
季節でいうと夏レスター・テにあたる。

ビルが密集しているので暑さは倍増、他の学校なら涼しいビルの中で飯が食えるのだが・・・・いやこちらも中に入れば同じか。だが中は疲れる、息苦しい。

オレはレタス、チキンカツ、パン、チキン、レタスで作られた「患者のサンドウィッチ」の二切れ目を食べ終えた。コンビニ物なので味付けは微妙だったがチキンカツサンドと値段が同じだったのでチキンが多い分、お得だった。

「コンビニ袋の中にゴミを入れそのまま放置。一いつ皿のサンドウイッチである「太陽のサンドウイッチ」を掴もつとするとリュリに手を叩かれた。

「ねえ・・・・聞いてた・・・・？」

「ていうか喋っていたのか？」

どうせ大した話じゃないだろ、とは言わず「太陽のサンドウイッチ」の袋を開ける。

このサンドウイッチは簡単に言つて終え巴タマゴサンドだ。

しかしこれは生物実験機関で遺伝子組み替えされて作られた鳥「フェニックス」が生んだ「太陽の卵」を使ったタマゴサンドなのだとか。

フェニックスってネーミングはともかく「太陽の卵」を使った絶品グルメはかなり評判が良いらしい。

サンドウィッチの一切れを右手に持ち、そして消える・・・・。

・
・
・
は
?

「ああ、美味しい」

ああ、アーサー食つたのかよ・・・・・なぜかサンドウイッチが食われていくのをみている、ああ最後の一 口を食われた・・・・・食われた?

「『ゴルアア！人の昼飯何食つとるんじや吐き出せさつたと吐き出せサンドウイツチも懺悔も魂も全て吐き出せ！』

「おえーっ、魂でましたーっ

三秒の沈黙。
オレは片手首締めから両手首締めに変更。

「ぐつえ、ギブ、ギブ！ [冗談だから！] それに出ないつて！ ゆで卵のうの字も出ないつて！」

「・・・・・八ア?」

何で食つてんだよ、アンタ？ ていうか一切れ目・・・・・。

「ホラ、自業自得」

「なんかしたか、オレ」

おまえ話聞いてなかつただろ?と問いかけてくるアーサー。

「ああ？」と空返事をすると彼は呆れながら返事を返した。

「リューリが休みにどこかへ行こうって言つてたんだよ、ヨハンと二人で

「さう、三人で！」

ああそれか……リューリの顔が紅く染まつているのははどうあえずスルー。何されるか分かったモンじゃない。

気がかりはどうしてそんなに「何処か」へ行きたいのか、なぜオレとなのか。お前らだったら他にいるだろ、ファンクラブの奴らとか。

「ほら、前にさ「また今度」って言つてたでしょ……？」

前……か。いつも何処かへ行こうと誘われた時は「また今度」で断つている。それほど込み入った関係にはなりたくないかった。

どこか面倒になつて來たので左手でカバンを持ち立ち上がつた。昼飯の「ミミ」は勝手に中身を食われたのをそのまま放置した。

「帰るのか？」

「ああ、やる事あるからまた今度な」

そうアーサーに返事をし、右手を挙げ屋上からである。

オレにはやる事など一つも無い事を一人は知つてゐるだろう。どうして二人はそのことを言わないのか、いらない親切でも掛けていふのだろうか。しかしはいらない親切など掛けて欲しくも無いのに。

どうして一人はオレを選ぶのか。オレと行く「何処か」に意味があるのだろうか。オレが冷たくすれば一人は遠ざかっていくだろうか・・・・・。

・・・・・また今度考えよう。

一瞬「また今度」と言つて逃げてしまふ自分が情けなく思えた。

またここに来てしまった・・・・・・・いや、この場所くらいしか行く場所が無いのかもしれない。

オレはいつもの元ゴミ焼却場兼タイヤの放置所に来ていた。周囲にはタイヤが溢れて山になり、昨日までは広かつた元焼却場へ続く道がなんとか残っている。

元焼却場にはクラヴサンがめり込んで出来た橈円形の穴がぱつくりと口を開けるように広がっていた。

そして黒い物体がタイヤの山から剥き出しで佇んでいた。昨日の事は本当だつたのか・・・・・・・今更ながらそんな事をぼうつと考えていた。

黒い物体にゅつくりと近づき、その光沢のある表面を撫でるようについた。出しつ放しだつたので少し熱を持っている。

そして横に長い黒いふたを開けた。そこには昨日と変わらない白
ピアノ
と黒の奇麗な鍵盤が並んでいた。

「奇麗に作られているな、コレは」

「怖つ！」

反射的に振り向くとすぐ背後に、ほつれ氣味の栗毛のマリアが不思議そうな目で鍵盤を見ていた。そしてその視線がオレのほうを見た。

「人見て第一声が、怖っ！って何？」

そんな汚い白衣着ていたらバケモノにも見えるだろ、多分。

「それより何していたんですか？」

「二イチヤンなんか・・・・・別に良いか。いや他に使えるモノ無いかと思つてさ、二イチヤンも来い」

「なんで命令形？」

「来い！」

マリアに腕を強く掴まれ元焼却場に連れて行かれた。千切れる！腕が千切れる！絶対手形付くつて！

焼却場の中は大きな穴が窓の役割をし、少し傾いた日差しが差し込んでいた。

マリアにようやく腕を放され、最近の女性は細身で力が強い事を痛感した。

妙な臭いに鼻を摘まむ、色々な臭いが混じっているようだ。

ゴミ焼却場は今は機能していないため、処分されていないゴミがあちこちに山になつて放置されている。そのゴミの山は大小様々なモノが積み上げてあり、原型をどどめていないモノも存在している。マリアが一つの「ゴミの山をあさり始めた。この人にモラルという言葉は存在しないのか。正直見ていられない。

「で、決めたのかい？二イチヤン？」

いきなり顔も見ずに話しかけられ、ビックリするのを通り越しゾクツとした・・・。

突然話しかける癖を止め、と勢いで言おうとしたが質問に答えていないので止めた。

「乗りません、絶対に」

「おっ、オレ使える」

聞いてねえ・・・・マリアはオレを無視し、拾い上げたモノを白衣のポケットに入れていた。

「オルガヌムがどんなヤツか聞いてんの？」

またいきなりだな・・・・もうどうでもいいか。しかしどんなヤツと聞かれてもあまりピンと来ない。

「敵・・・・じゃないのか？」

「そりや敵だらうね。モノ壊してるし」

かなりアバウトだ・・・・モノ壊してたら敵なのか？

「オルガヌムには視覚、味覚、嗅覚が無い。だがそれを補つて余る聽覚が備わつてゐる」

「オルガヌムには視覚、味覚、嗅覚が無い。だがそれを補つて余る聽覚が備わつてゐる」

「その聽覚はどんな音も聞き逃すこととは無い。恐らく地球の全ての音を捉える事が出来るだらうね」

「で、オルガヌムを倒すのがシンフォニアなのか」

「そ。オルガヌムは突然強い音を聞かせると動きが遅くなるからね、その間に倒す。音を奏でる武器である器楽武装を装備しているのがシンフォニア」

「それとオレに何の関係があるんだ?」

「音の中^{△ジカ・インストゥルメンターリズ}で道具の音楽がオルガヌムによく聞こえ、効果がある。あの黒いのも例外じゃ無い。そしてオルガヌムは強い音が鳴る方へ移動しその音を消した後、また強い音の鳴る方へ移動、これを繰り返して八年間主要都市を滅ぼしていった」

長い説明の間にマリアは奥の「//」の口に向かっていったのでとりあえずついて行く。

「…………つまり?」

「つまり昨日のオルガヌムはニイチャンが呼んだって事かな」

まさか……アイツはオレが呼んだなんて……正直半信半疑だ。

そこで会話が途切れ、「//」をあわる音と時々鳴る金属音がひとときは立つように聞こえた。

「だけどあんた等だつてシンフォニアで音を奏でてるだろ。あんた等がオルガヌムを呼び出してるんじゃ無いのか」

マリアがゴミをあわる手を止め、オレに半身だけ向け答える。その日は今までの彼女の日付きよりも鋭さを増していた。

「そう、私たちはそりやつてオルガヌムを一體一體風漬にしていく、コレが作戦。近づくオルガヌムはすべて消す」

その迫力に思わず唾を飲み込む。かと思ひと田代が緩み、顔と身体がこちらに向く。

「まひ、私は乗らないんだけど」

そう付け足すとマリアは両手を白衣のポケットに突っ込んだまま、真っ直ぐにオレの方へ歩み寄ってくる。

「とりあえず、両手出してみ

そう言われ、両掌の指を前に向ける形で差し出した。とたんに力チャツと金属の音がした。

手元を見ると銀の輪がオレの両方の手首に通っていた。輪と輪は銀の鎖で繋がれている。

「なんだ、コレー」

「うん? ああ、旧型の手錠。捨ててあった」

「見れば分かるー。わしあと外せー。」

「・・・・・・・・・・・・

「聞けええー!」

「黙れ!」

その言葉を耳にした途端、首筋に首筋に激痛が走ると同時に意識が朦朧とし、オレは意識を失った。

目が覚めるとそこには清清しい程澄み切った蒼い空^{アッシュブル}がどこまでも広がっていた。

そこには自分以外にクモもモノもヒトも何も無い。
そこには自分だけの自由の世界が広がっている。
こんな場所にたつた一人で生きて行きたい、そして朽ちて行きた
い。

だけどオレがヒトである限り、空は飛べない。

ヒトには自由の翼が無い。

じゃあ、なんで飛んでんだ、オレ？

手元を見ると手首には銀の手錠が掛けられている、いや、もつといろいろ付いてんな・・・・・一本の腕の手首と肘の間に銀色の硬そうなリストバンド型の手枷が付けられ、そこにはケーブルが繋がれており、ソレと同じような物が左右の二の腕と股と脛に付けられている。

「なんだ、コレ！」

思わず口に出してしまった。よく見れば一度乗った事のあるクラ
ブサンの頭^{ラ・テスター}だつた。

氣を失ったオレ乗つててよく飛んだな、コレ・・・・・。

「おつ、一イチャン生きてたか

怨むべき声を聞き背後に振り返ると汚い白衣を着たままのマリアが立っていた。その手にはケーブルのような紐が繋がっている黒い

D字型の取つ手に見えるモノを持つている。

「いやあ、首筋にチヨップして氣絶させるヤツでドリマとかでもよくやつてるけどさ、死ぬ可能性が五分五分くらいってフィリップから聞いてホントに死んだかと思つたわー」

「ソレつてオレが言つ」とじやないか?いや、なんで勝手にヒート乗せて変なモン腕とか足に取り付けてんだよー!」

「ああ、首にも付いてるけど?」

「え?、マジで?」

首のあたりを確かめてみると「レスレット」の厚さの首輪が本当に付いていた。

コレはいつたいなんなんだ・・・・・?思い切つて聞いてみると事にした。

「なあ、この首輪は何のための首輪なんだよ?」

「お、いたいた」

「やつかも言つたけど聞けよー!」

「やれどこひじや無いんだよねえ、ほり前のアレ」

多少憤りは感じるが仕方なく前方に意識を集中させた。

最初はよく見えなかつたが、目を凝らしてよく見るとステルス機か何かに見えた。最も今はステルス機なんて旧ローマでは作られていないだろうが。

「なんだ、アレは」

「オルガヌム・モテラート、としか言こよつが無いね」

「たつた一体つて」とは結構でかいのか?」

無視かよ・・・。どうやらオレが言つた事が間違つてこるよつだ。
田の前には蒼い空をバツクに通常より高いビルがちらほら見える。
高度が徐々に下がつてこようだ。

モテラートは田を凝らしそうに見える距離に近づいていた、数百体

の群れで。

銀色のモテラートは横幅が田算でクラウサンの高さと同じくらい
で厚さは一~二メートルつて所だらう。

「一 体じや無いだろ?」

マリアが嫌味をいやらしへ言つた。その言葉は少なくともオレには嫌味に聞こえた。

「そんなコト言つてる場合か? 結構な数が来てるだー。」

「言われなくともリー。」

「のままだと鉢合戦になるかもしねない。少しヒヤヒヤしてしまひ。

すると後方へ通り過ぎていくビルの動きが止まり、ビルはモーターの下へ消えていった。

なんていうか・・・・・・わきから前しか向いてないな、コイツ。

「周りが見えねえぞ、『トイツー』」

「そのための首輪だよ！」

「解るように説明しろ、意味不明女！」

「二イチャンが動かそうと思えばクラグサンも同じように動くべ動テリよ！」

以上！」

「物足りないくらい簡潔な説明をどうも！」

つまり首輪の他に腕と足に付いている枷も身体と機体をリンクさせるモノなのだろうと勝手に解釈した。

そう考えるといきなり胃の中のモノが食道へ戻つていく。景色が蒼一色で目印がない事からクラヴサンが落ちていてることに気付くのが遅くなつた。幸い口の中まで戻つてくることはさせなかつた。

突然、左の方から高い音が長く聞こえた。

頭を左に向けようとクラヴサンの頭も左に動いたようだ。結構遠くには茶色い箱を積んで作ったような一足歩行のシンフォニアがビルの上に立つていた。

ソイツの腰にある大砲のような金色のパイプが白っぽい音の弾丸を六連射した。弾丸は何体かのモデラートを貫通したが、群れは二手に分かれて逃げたため一気に全滅という訳にはいかなかつたようだ。

だ。

分かれた内の一手はもう一体の銀色のシンフォニアが先回りして

いた。

ラルジョン

銀色は無駄なものがあまり無いヒト型のシンフォニアで、同じ色の棒が両手で握られていた。

地面から芽が顔を出すように、モーターの下からビルが次々と迫

り上がってきた。地面が近い。

頭を前へ戻して目前の比較的広い道路を着地地点とし、頭を動かさず足の指先から着地しようと思つた。

道路には様様なモノが散乱していた。

碎かれたビルの残骸、車の形が残つている鉄クズ、人形のようない動かないヒト。

元が何かすら解らないモノもあつた。

そんなモノを見てもオレは何も感じなかつた。だつてヒト、ゴトだから、オレにはラルジョン関係無い。

後ろを向くと銀色のシンフォニアの方に行かなかつたモデラートの群れがビルにぶつからないよう身体を縦にして向かつて來ていた。ビルがあるから左右には動けない事を確認した時、先頭と一番目の先端である口が開いた。

一人の女の声と共にさつきのシンフォニアと同じような音の弾丸を口から飛ばした。

跳躍するために膝を曲げようと思う、道路が少し沈んだような感覚を覚えると同時につま先に力を入れ跳躍しようと思つと、ビル五階くらい跳躍した。

そして落ちる前に飛ぶような感覚がし、ビルの階数がどんどん減つていくように見えた。

「おい、これじゃアイツら倒せねえぞ」

マリアに見せるために手錠の付いた両手を上へ上げると鎖の揺れる音がした。

「ふーん? やる気になつたんだ?」

「時間が削られるのは嫌だからな」

質問しているよつには全く聞こえず、どこか挑発的な口調で尋ねられた。もつとも時間が欲しいほどやりたい事も無いのだが。

あつそ、と素つ氣無く返事を返したマリアは鍵を外そとしない。

「鍵外せよ！」

「その鍵壊てるから自分で外せるんだけど」

本当に、しかも簡単に外せた・・・・。こんなモノに気付かず
に縛られていた自分が本当に情けない・・・・。モデラートの声
が下から聞こえなければ一時間は沈んでいただろつ。

四～五人の知らない言葉を発する女の声と共に来る音の弾丸を、
酔いそうなくらいのスピードでかわしている最中に例の鍵盤が現れ
た。

やはり黒い物体の鍵盤と同じモノに見える。

同じモノならば深く考えずに弾けばいい。時間なんて自由に過ぎ
ていく。

弾こひ、自由に。

指先で音を奏で始める。

激流のようなテンポ。

鍵盤のように白い音の刃を纏つた黒い棒が宙を自在に動き回る。
鍵盤の上を指が踊る。

胸が高鳴るような旋律。

冷めていた心が抑え難い激情に変わる。

旋律が奏でられて一分が経つた。

十二の黒い棒がモデラートを追い、刺さったかと思つたがモデラ
ートの群れは寸前でかわしていった。さつきから「コレと同じ展開を
何回も見ていく。

一回の攻撃につき十一本で奇襲しているが、一體倒すのが精一杯
だ。

全て寸前で避けられる。

マリアが言つた事は完全に嘘だ、音によつてモデラートの動きが止まつた事は一度も無い。だが、アイツに当たつても解決しない。何か策を考えなれば……。

考えながらも指を踊らせ曲を弾き続いている。

思い付いた。

思考では無く激情による直感。

「マリア、ビルに降ろせ」

ビルの上に爪先から降りた。先程の群れが大きく弧を描いて戻つてくる。

ソレが敵に対して有効かどうか考える前に、オレは指を止め右側の骨の様な翼を見ていた。

黒い棒が戻ってきて、枝分かれした六つの骨の先端に装着されたのを見届けると、一番外側の骨を根元から引き抜き、モデラートの群れに槍の様に投げた。

そしてすぐに曲を再開させると黒い槍の先端から白い音の刃が激情の旋律と共に現われた。

突然槍からの旋律に一瞬モ^{モード}デラートの動きが止まる。

その一瞬は充分に足りた。

黒い槍に次々と突き刺さり、貫かれていくモ^{モード}デラート。

曲を弾いていた指を再び止めると黒い槍は失速し緩やかに落ちていつた。

たつた八体しか倒せなかつた。勢いが足りなかつたかもしれない。自分が戦つている群れにもまだ何十体か残つている。

十一本残つているから計算では全て倒せるかもしれないが、手元が狂つて外すかもしれない。

手に持つて戦えるか・・・・・?

そう思うと既に一本目の骨を折る音が聞こえた。

何かが問う。

そんな事をやる必要は無いんじやないか？オマエは戦わないんじや無かつたのか・・・・・・？

黒い腕が両手で十メートル前後の長さをした黒い槍の下の方を持っています。

確かにやる必要は無い。戦う必要も無い。だが今やらなければ死ぬ、オレが。

いつ死んでも構わない。けど殺される事だけはされたくない。

指が力タチだけの激情の旋律を奏でると槍の先端に白い音の刃が宿る。

オレが持つモノを他のモノの自由にさせたくない。

ビルの上を跳躍しようと思つ、次のビルの上に着地しようと思つ、その動作を繰り返して近づいてくる群れに向かひ。

もし、奴らが命乞いをしたならオレはこう返すだろつ

最後の跳躍をするとモーティマーが目前に迫る。槍を振りかざす思考とは別に指が無感情に曲を奏でる。

お前たちにオレを殺す自由があるのだから、お前たちを殺す自由がオレにはあるだろつ、と。

第一樂章 クライス レリアーナ(下)(後書き)

どうも木村です。
個人的理由で時間が無いのでさっそく終わらせてます。

クライスレリアーナ 作曲ロベルト・シューマン

題名のクライスレリアーナとは作家であり画家でもあり音楽家でもあったE・T・A・ホフマンの書いた音楽評論集の題名から引用されている。この作品はそれに靈感（突然ひらめく、素晴らしい考え。という意味らしいです）を得て作曲された。

この作品は1838年に作曲された、8曲からなるピアノ曲集で、ショパンに献呈された曲。

- | | | | |
|-----|-----------|-------------|---|
| 第1曲 | Agitato | issimo | 二短調 |
| 第2曲 | Con molto | espressione | nont
ropo presto |
| 第3曲 | Molto | agitato | 変ロ長調 |
| 第4曲 | Lento | assai | ト短調 |
| 第5曲 | Vivace | assai | ト短調 |
| 第6曲 | Lento | assai | 変ロ長調 |
| 第7曲 | Molto | presto | ハ短調 |
| 第8曲 | Vivace | escherzando | ト短調の8曲。
(Wikpediaから引用しましたが他を見ると少し違うよう
です) |

ああ、早く次話を書かなければ・・・ではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1605f/>

独奏のクラヴィーア

2010年10月9日07時37分発行